個

二〇二二(令和四)年度　個別学力検査　後期日程

外国語学部中国学科　小論文

【注　意】

一　試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

二　試験時間は九時三〇分から一一時〇〇分まで(九〇分間)です。

三　この問題冊子は表紙以外に三ページあり、解答用紙は一枚、下書き用紙は一枚あります。

四　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

五　解答はすべて解答用紙の解答欄に縦書きで記入してください。

六　句読点等は一字に数えます。

七　解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。

八　解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。

九　試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問一・問二に答えなさい。

外国語学習において語彙は中心的なテーマの一つである。音声や文法に比べて、意味に関する誤りはコミュニケーションの齟齬（＊）を生みやすい。そもそも語彙力がないと聞きとりもできないし、何か言いたくてももどかしい思いをするばかりで何も言えない。外国語でコミュニケーションを取るようになれるためにはしっかりした語彙を持つことは必須の条件なのである。

しかし一般に、外国語の授業では、同じ意味領域において語は互いにどのような基準でその領域を切り分けているのかといったことが系統的に教えられるようなことはほとんどない。たいていは、教科書に新しい単語が出てきたら、その辞書的な意味とその文脈で用いられる意味を確認するくらいだろう。そもそも日本での外国語の語彙学習教育では主にどうしたら語彙数が増えるか、という観点が主であった。学習者の習熟度の測定においても、語彙数の多さが習熟度の直接の反映であるという考えの下、辞書の語義を与え、多肢選択の形で複数の語の候補から語義に合うものを選ぶという形式のテストが標準的に行われていた。他方、学習者がひとつひとつの語の意味をどれだけ深く理解し、的確に運用できるか、という観点はほとんど考慮されていない。日本人には外国語のテキストを読むのは比較的得意で、難しい文献をなんなく読めても、話したり書いたりするのは苦手という人がとても多い。その原因はほとんど、辞書に書いてある語の意味を覚えていても、語の使い方が理解できていないことにある。

単語の意味は単語単体では決まらず、それぞれの意味領域の中に属する一群の関連する単語同士の間の関係の中で決まる。これはとりもなおさず、一つの単語の意味をほんとうに理解するためには、その単語と同じ意味領域に属する他の単語との関係を理解する必要があり、さらに、その意味領域がいくつの単語でどのように概念が切り分けられているかということを理解する必要があるということだ。

一つ一つの単語の意味を学ぶということは単語が属する意味領域全体のマップの中でその単語の位置づけを学び、さらに領

域の中で隣接する他の単語とどう違うのかを理解し、他の単語との意味範囲の境界を理解することであることは、外国語を学習する時にも同じである。母語と外国語の意味領域が同じように切り分けられていて、母語の単語と外国語の単語が同じ範囲できれいに対応するのなら、外国語を学習する時には単に母語に対応する単語を外国語の単語に置き換えればよい。つまり、音を挿げ替えればよいだけの話である。しかし、実際にはそうはいかない。異なる言語は世界を異なる仕方で分節するからだ。

言語が世界を分節するということ、さらに分節の仕方が言語によって相対的であることを、色を例に考えてみよう。日本語では基本的な色の名前はいくつあるだろうか？英語では十一の「基礎名」があるといわれている。十一とは英語では、黒、白、灰、赤、黄、みどり、青、ピンク、紫、オレンジ、茶の十一語である。これは直感的に「これは何色」と答えるときに色の名前にあうので、日本語の基礎語も英語とだいたい同じと考えてよいかもしれない。日本語と英語は、ほぼ一対一対応が可能な色の語彙を持つようにみえる。しかし、詳しく調べてみると、一般的にはきれいに対応すると信じられている日本語と英語のそれぞれの色の名前の範囲は実はぴったりと同じというわけではない。それにもかかわらず、母語と外国語で、一見対応する単語があると――つまり本来「面」である意味のどこかの「点」で二つの言語の単語の間に重なりがあるとき、その外国語の語が「面」としても母語の語の意味と重なる、と考える思い込みは非常に根強い。人は当然ながら無意識にそれぞれの母語のことばでの区切りかたがあたりまえで、もっとも自然な世界の分割の仕方だと思っている。しかし、言語によって線引きの仕方は多様だ。同じだと思っていた語どうしの範囲が食い違い、コミュニケーションに齟齬をきたす、ということはごくあたりまえのことなのである。

外国語の語彙学習が難しい理由は、単語それぞれがどのような文脈でどのように使われるのかという経験を経ずにことばで与えられた定義から単語の意味の範囲を決めようとし、その時に、母語で対応する単語の範囲を無意識に外国語の単語に当てはめてしまうことにある。外国語教育で、語彙学習は音声や文法に比べて一般的に軽い比重で扱われ、学習者の自習に多くをゆだねられてきた。学習者は外国語の語の意味を辞書で与えられる点として理解し、面としての境界、広さ、構造は点として母語に対応する語と同じであると無意識に思う。その結果、長い間外国語を学習していても、母語を学習する子どものように

成人母語話者の意味地図に近づくように領域に属する複数の語の関係を整理するということをしない。つまり意味の再編成過程自体がなかなか起こらないのである。

しかし、ここで改めて、我々はどうしてその言語のその領域の単語の使い分けでつまづくのかを考えてみると、その言語についてばかりか、自分の母語についても、あまりに無自覚であったためではないかと考えさせられるのである。無自覚に、自分がなじんだ母語の概念で外国語を理解しようとするのではなく、違った基準で概念を切り分ける言語とつきあいながら、自分をとらえている母語の概念枠組みに敏感になることも、実は外国語学習においては重要なことなのではないか。その意味では、母語について言語感覚を磨いておくことが、外国語そのものを学習すること以上に、外国語の学習に貢献する可能性も大いにある。

（＊）「くいちがい」の意の漢語的表現。

（今井むつみ、針生悦子『言葉をおぼえるしくみ　母語から外国語まで』による。ただし、出題に際し原文の一部を改めた。）

問一　問題文を四百字以内で要約しなさい。（百点）

問二　問題文を踏まえ、語彙学習についてどのように考えますか。具体的な例を挙げて四百字以内で述べなさい。（百点）